Cognitive Factors of Neg-Raising Phenomena

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/384

否定辞繰り上げ現象の認知的要因について

守 屋 哲 治

Cognitive Factors of Neg-Raising Phenomena

Tetsuharu MORIYA

I．否定辞繰り上げ現象とは

複文構造において，統語上は主節に存在する否定辞が，意味的には従属節を修飾していると解釈される場合がある。例えば例文（1a）は，否定辞が主節にかかる（1b）のような意味と従属節にかかる（1c）のような意味の二通りの解釈が可能である。

(1) a. I don't think he will come.
b. It is not the case that I think he will come.
c. I think he will not come.

このように主節の否定が従属節にかかるように解釈される現象を，Horn (1989) に従って否定辞繰り上げ現象（neg-raising phenomenon，以下NR現象と略記）と呼び，上の例文におけるthinkのようにNR現象を示す述語をNR述語と呼ぶことにする。

本稿では，NR現象がどのように扱われてきたかを振り返った上で，NR述語を規定していく上で認知的要因が重要な役割を持つことを指摘する。そして，日本語におけるNR現象においても同じような要因が関与していることを述べる。

II．先行研究

1．変形操作による説明

Neg Raisingという名称自体が，当初この現象が変形操作によって捉えられていたことを示している。[1] NR現象が，従属節にある否定辞が主節へ変形操作によって移動された結果生じたものであるという主張をし，その統語的証拠を提示したものにR.Lakoff (1969) がある。そこでは根拠として次のような例が挙げられている。

(2) a. I didn't think John would leave until tomorrow.
b. I don't suppose that Yankees will win, will they?

(2a) の従属節に用いられているuntil句は (3a－b) に見られるように，通例状態を表すか，繰り返し行われる動作と解釈される述語と共起し，(3c) のように単一の動作を表す述語とは共起しない。ただし，(3d) のように単一の動作が否定されると，「その動作が行われていない」という状態を表すことになるので容認可能になる。

(3) a. John slept until 5 o'clock.
b. The guests arrived until 5 o'clock.
c. *John arrived until 5 o'clock.
d. John didn't arrive until 5 o'clock.

平成9年9月16日受理

従って，(2a) の従属節John would leave until tomorrowは，leaveが単一の動作を表す述語であるため，単独では非文になるはずである。しかしこの文が容認可能なことから，Lakoffは (2a) が(4)のような構造から否定辞繰り上げ変形によって派生されると考えたのである。

(4) I think John would not leave until tomorrow.

(2b) は付加疑問形成が主節の動詞ではなく従属節の助動詞に基づいて行われている例であるが，Lakoffによれば，(2b)は(5)のような対極性(polarity)を同じくする付加疑問文が持つ皮肉なニュアンスがないという。

(5) (So) John has left, has he?

そこでLakoffは (2b) も，基底構造では否定辞が従属節内にあり，付加疑問形成のかかった後に否定辞繰り上げ変形がかかって派生されると主張している。

しかし，(6)から(9)の例で示されるように，どちらの場合にもこのような説明が通用しない例が存在する。

(6) a. *I didn't ever think that John would leave until tomorrow.
　　b. *I never thought that John would leave until tomorrow.　R. Lakoff (1969：142)

(7) a. I doubt that John will arrive until 4:00.
　　b. Bill is afraid to leave until his mother comes.　Jackendoff (1971：292)

(8) a. I don't know that it's very important, is it?
　　b. I 'm not sure that's right, is it?　Cattel (1973：623)

(9) a. I don't think they will win, will they?
　　b. *I think they won't win, will they?　Jackendoff (1971：294−5)

(6)は，一見すると (2a) の類例と見られるが，主節に否定を強める副詞が加わることによって，NR現象としての解釈ができなくなる例であり，(7)は主節に否定辞が顕在化しておらず，否定的な意味合いを含む述語自体が従属節に影響を与えていると考えられる例である。また(8)は主節の述語がNR述語ではなくとも，従属節における付加疑問文の振る舞いが (2b) と同様である例で，(9)は否定辞繰り上げ変形をかけずに派生した文が非文法的になり，この変形操作の随意的な性質に反する例である。[2]

Horn (1979：168) は，(10)のような倒置が起こっている文を，統語的な移動の証拠として用いている。

(10) I don't think that ever before have the media played such a major role.

この倒置は，(11a) と (11b) の対比にみられるように，否定の副詞が前置されたときに義務的に起こるものと考えられる。そこで (11c) のように倒置が起こらないと容認可能性が落ちてくるということが否定辞の統語的移動の証拠であるという。

(11) a. I think that never before have the media played such a major role.
　　b. *I think that never before the media have played sucha a major role.
　　c. ??I don't think that ever before the media have played such a role.

また，McCawley (1988：577) が指摘しているところによればこの現象は(7)のような否定を含意する述語などでは起こらないという。

(12) a. *I didn't say that under any circumstances would he hellp you.
　　a'. I didn't say that under any circumstances he would help you.
　　b. *I doubt that at any time has he visited Smith.

b'. I doubt that at any time he has visited Smith.　McCawley (1988：577)

変形操作の理論的位置付けが，これらの議論が行われていた当時と現在で大きく異なってきており，否定辞繰り上げのような変形操作が現在の生成文法理論で認められる可能性はあまりない。また(6)−(9)のようなはっきりとした反例も存在するため，基本的にはこの説明方法は採用できない。しかし，(11)から(12)に示したような事実は，変形による説明を支持するものとして残る可能性がある。

2.含意・推論による説明

否定辞が従属節から主節に移動したと考える立場に対し，否定辞はあくまでも主節にかかっているだけであるが，その文の解釈において何らかの含意あるいは推論によって従属節に否定辞がかかった読みが導かれるという立場がある。

Partee (1973：335-6) は，(13a) のような文が多義的であるという主張は，(13b) が (13a) を一方向に含意するという主張と同じであるとしている。すなわち，(13b) が真であれば (13a) も真になるが，その逆は成立しない。

(13) a. A doesn't believe that S
　　b. A believes that not-S

しかしこの説明で問題になるのは，このような含意関係が成立するのはNR現象を示す文に限らないという点である。例えば (14a) は普通，NR現象の読みはなく，多義的な解釈は受けないにもかかわらず，(13)の場合と同様に (14b) は (14a) を一方向に含意している。

(14) a. A isn't certain that S
　　b. A is certain that non-S

Jackendoff (1971：290-1) は，(15a) の読みのうちのひとつと (15b) との同義性は推論的な性質のものであるとしている。それは変形操作で派生することが不可能な (15c) のような文でさえも多義性を持つからだという。

(15) a. John doesn't think that Bill went.
　　b. John thinks that Bill didn't go.
　　c. John doesn't think that Bill didn't go.

Jackendoffはさらに，(15a) のような文の解釈においては排中立 (law of excluded middle) のような原則が作用しているのではないかと示唆している。このような考え方を，Jackendoffとは独立に，モデル理論的枠組みを用いて明示したのがBartsch (1973) である。Bartschは，(15a) のような文が (15b) のように解釈されるのは，概略(16)のような過程を経る語用論的含意のためであると主張している。

(16) a. F(X, P) or F(X, −P)　(文脈に依存した語用論的仮定)
　　b. −F(X, P)　(話者の発話)
　　c. ∴ F(X, −P)

(16)は排中律的仮定で，主語Xが補文で示される命題Pに対してFで示される心的態度を持つか，否定命題である−Pに対してそのような心的態度を持つかのいずれかが真であることを表す。そこで発話が (16a) の前半を否定するものであることから，(16c) が導かれるのだという。Fは心的態度を表わす述語によって具現化されるとしている。しかし，心的態度を表す述語の中でもbe certain, realize, know などのようにNR現象が見られないものもあり，またそもそも(16)のような語用論的推論がなぜ特定の述語の場合に限られるのかが不明のままである。

含意や推論による説明で問題になるのは，NR述語をどのように規定していくかという点である。

変形規則として取り扱う立場では否定辞繰り上げ変形を小規則（minor rule）とし，規則の適用を受ける述語を指定するということが可能であった。NR述語はある程度意味的に規定していくことができるが，その意味類に属する述語がすべてNR現象を示すわけではない。本稿では，NR現象は基本的に何らかの意味解釈上の機構が働いた結果生じるものという立場をとるが，NR現象を示す述語とそうでない述語とをよりきめ細かく規定していくには，まずNR現象自体の機能に着目しなければならない。

そこで次節ではNR現象の機能について論じている先行研究を概観し，NR現象がどのような働きを持つのかを考察する。

III．NR現象の機能

NR現象の機能が何かという問いは，含意や推論などのような意味解釈的な立場に立てば，主節に否定辞がある場合と，従属節に否定辞がある場合とで，どのような機能上の差異があるのかという問いに言い換えることができる。

否定辞の位置の違いによって否定の強さが異なるということに関しては，いくつかの指摘がある。例えば，Bolinger（1977：56）では，（17a）は適切だが，（17b）は不適切であるとしている。

(17) a.　I hope I haven't forgotten anything－let's see, there's the key, and the food for the cat, and the card for the mailman.

b.　*I hope I have forgotten nothing－let's see, there's the...

（17a, b）はともに話者が旅行に出かける前につぶやいている独り言という設定であるが，anythingが用いられている（17a）の場合は，忘れ物をしている可能性，すなわち肯定文が真になる可能性を認めているために，ひとつひとつのものをチェックするという行為と矛盾を生じることはないが，（17b）ではそのような可能性を全く認めない文であるため，忘れ物がないかチェックするという行為とは相入れないとしている。さらにBolingerはR.Lakoffとの個人的談話の中で，（1a）のようにNR現象が起きている場合の否定の力は，（1c）のようにそれが起きていない場合よりも弱いという。同様の指摘は，古くはJespersen（1917）などにも見られる。

このような否定辞の位置と強さとの相関関係を一般化して示しているのが，Sheintuch and Wise（1976）で，表現形式に複数の可能性が存在する場合には，否定辞が中立的位置である動詞の直前よりも左へ行くほど話者の確信度が弱まったり，直接的な知覚を表し，右へ行くほど確信度が強まったり，間接的な知覚を表すようになるとし，(17)のようなneg-attractionの機能と，NR現象の機能を統一的に説明しようとしている。例えば(18)に見られるような対比を，否定辞の位置の違いによる強さの差と，動詞の表す意味との相関によって説明している。

(18) a.　My God! It's a tornado! But look－it doesn't appear to be damaging anything.

b. ??My God! It's a tornado! But look－it appears to be damaging nothing.

(18)のように主節の動詞が知覚を表す場合は，否定辞が主節の動詞側にあれば話者の直接的知覚を表し，従属節のほうにあれば客観的な状況を示すことになる。そこで（18a）が容認可能なのは，後半の文が内容的に前半の文と食い違っていても，主観的な表現なのでずれが許されるのに対し，（18b）の後半の文は客観的な状況の否定になるので，内容的なずれが許されないためであるとしている。

Prince（1976：415）も，NR現象の機能は，否定を挿入的表現に移すことによって主観化することであるとしている。この根拠として，同じ動詞でも挿入的な意味で用いられていると解釈できない場合はNR現象は起きないことを挙げている。

(19) a. I don't guess that Harry will leave until Tuesday.
b. *I'm not guessing that Harry will leave until Tuesday.

(19a) においてguessはほぼthinkのような意味合いを持っているが，(19b) のように進行相で用いられる場合には「想像する」という意味で挿入的ではなくなり，したがってNR現象を示すことがないために非文になるわけである。

このようなことから，NR現象を示す文と，それとほぼ同意の否定辞が従属節にある文との機能的差異は，主節のほうに否定辞を移すことで否定の強さを弱めるという点であり，具体的には，否定をより主観化したり，話者の確信の度合いを弱くするということになる。しかも，このような差異は，NR現象特有のものではなく，否定辞の位置と強さの一般的相関関係から派生するものであるということが言える。[3]

Ⅳ. NR述語の規定

2節では，NR現象を変形規則で説明する立場には事実面と理論面の両方の問題が存在する一方，含意・推論などで取り扱おうとする立場には，NR述語をどのように規定していくかが問題になることを述べ，NR現象の機能を考える必要性を指摘した。そして3節では，NR現象の機能が，否定辞を主節に置くことによって否定の力を弱め，話者の否定命題に対する確信度が低いことを示したり否定を主観化することであることを見た。本節では，このようなNR現象の機能を踏まえ，NR述語の規定に関する先行研究を概観し，その問題点を指摘する。

1．中間尺度の原理

従来NR述語に属するとされていたのは，意見，知覚，可能性などを示すものとされていた。Horn (1978：187) には次のようなＮＲ述語の例が挙げられている (%は，NR述語としての容認性が個人によって異なることを示す)。

(20) a. OPINION: think believe, suppose, reckon, feel (%guess, %anticipate)
a'. PERCEPTION: seem, appear, look like, sound like, feel like
b. PROBABILITY: be probable, be likely, figure to
c. INTENTION/ VOLITION: want, intend, choose, plan
d. JUDGEMENT/ (WEAK) OBLIGATION: be ought, should, be supposed to, be desirable, advise, suggest[4]

このような意味的特徴は，英語に限らずNR現象を示す言語であればほぼ共通している。NR現象が，主観化や確信度を弱めるために存在するのであれば，主観性や確信度に関わる述語が用いられることは自然である。しかしそれはあくまでも必要条件にすぎず，このような意味類に属するものすべてがNR述語になるわけではない。例えば可能性を表すものでも，be certain, be possibleはNR述語にはならない。意味類の指定以上のよりきめ細かい規定が必要になってくる。

そこでHorn (1978) では，中間尺度の原理 (mid-scalar principle) というものを提案している。これは連続的尺度が想定される意味領域において，NR述語になることができるのは尺度の端に属する述語ではなく中間に属する述語であるというものである。例えば，可能性の意味領域においては，(21)のような尺度が想定できる (尺度上の相対的位置関係は，含意関係によって決定される)。

(21)　possible　likely　certain
probable

0　.5　1

possibleは確信度が低い状態，certainは確信度が高い状態を表す。それに対してlikely，probableは確信度が中間の状態を表しているので中間尺度の原理によりNR述語になれるのだという。なぜ中間尺度の原理が存在するのかということに関して，Horn(1978：196)は，中間尺度の述語が主節の述語になっている場合は，主節に否定をかけても従属節に否定をかけても機能的には大きな差がでないからだとしている。(22)は(21)の述語に否定をかけた場合の尺度であるが，possibleの否定not possibleは強い極に位置づけられ，not certainは弱い極に位置づけられている。しかし，not likely, not probableは依然として中間に位置づけられている。

(22)　not certain　not likely　not possible
not probable

0　.5　1

この原理はNR現象の機能から派生するものと考えられる。すなわち，確信度が弱まるとか主観化するということが言えるためには，比較対象となる二つの形式の命題内容が大きくずれてはならないためである。

2．言語間，個人間による差異

中間尺度の原理を持ち込むことによって，単に意味類の指定を行うよりもきめ細かくNR述語の規定をすることが可能になった。それでも，Horn自身が指摘しているように，特定の言語内，あるいは言語間の比較においても，これだけでは説明のつかない事実がいろいろある。suppose と guess はほぼ同じ意味を表すと考えられるが，supposeがほとんどの英語話者にとってNR述語であるのに対して，guessをNR述語とするかどうかには個人的ばらつきがあるという。同じことはexpectとanticipate, likelyとprobable, wantとdesireやwishとの関係にも当てはまる。英語のhopeは通例NR述語にはならないが，ドイツ語でhopeにあたるhoffenはNR述語である。ヘブライ語ではthinkにあたるxosevはNR述語であるがbelieveにあたるmaaminはNR述語ではない。マラガシー語では逆にbelieveにあたるminoがNR述語で，thinkにあたるniheがNR述語ではない。[5]

Horn (1989) は，このようなばらつきはNR現象をMorgan (1978) の言う短絡化した推論 (short-circuited implicature，以下SCI) と同類のものとみることによって説明できるとしている。SCIとは，文字通りの意味と伝えようとする意味がずれている場合に，ある形式に関してはそのずれを場面ごとに推論して埋めるのではなく一足飛びに相手の意図を把握することを指す。

(23)　a.　Pass the salt.
　　b.　Can you pass the salt?
　　c.　Are you able to pass the salt?
　　d.　Do you have the ability to pass the salt?

例えば，(23b－d) はほぼ同じ意味を表すが，(23a) のような依頼の意味を伝えるのに，(23b) は用いられるが (23c, d) は用いられない。この違いは (23b) の場合は一足飛びに依頼の意味を伝えるように慣習化したのに対し，(23c, d) はそのような慣習化が起こっていないためである。Horn (1989) は，NR述語に関するばらつきが生じるのは，どの述語にNR現象を起こすようなSCIを認め

るかが個人ごと，あるいは言語ごとに異なるからだとしている。例えば，(24a) が(25)の意味を伝えるのに用いられ，(24b) が人によって容認度に差があり，(24c) が容認不可能なのは，thinkの場合はそのようなSCIがほとんどすべての英語話者にとって確立しており，guessはSCIが確立している人としてない人がおり，hopeはどの話者にとってもSCIが確立していないからということになる。

(24) a.　I don't think they'll hire you until you shave off your beard.
　　b.　%I don't guess they'll hire you until you shave off your beard.
　　c.　*I don't hope they'll hire you until you shave off your beard.

(25) I think they won't hire you until you shave off your beard.

この説明は，個人的，あるいは言語間のばらつきを，語用論的推論過程が慣習化する程度の違いということで説明しようとするものである。ここで問題になるのは，同じくSCIが関与する場合でも，(23)のような例では，どの表現が依頼として用いられるかということに関して個人的ばらつきが存在しないのに，NR現象の場合にはばらつきが生じているという点である。また，なぜある述語がほかの述語よりも先にNR述語として用いられるのかという問いには答えられていない。thinkがほぼすべての英語話者にとってNR述語になったのは，たまたまこの動詞に関してはSCIの程度が進み，guessに関してはSCIが起きかかっているところであるからにすぎないということになる。またこのような差異が中間尺度の原理から派生できるとも思われない。NR述語へのなりやすさが理論上予測できるほうがそうでないよりも好ましいことは明らかである。

そこで5節では，プロトタイプという概念をとりいれてNR述語へのなりやすさを予測する典型条件を設定し，6節では日本語のNR述語を取り上げて5節で提案した典型条件の妥当性を検討したい。

V．プロトタイプとＮＲ現象

1．プロトタイプとは

プロトタイプ (prototype) は，人間がさまざまな物や概念を範疇化していく際に，その範疇の中で最も典型的と見なされる成員のことを言う。古典的な範疇観では，ある範疇の成員に属するか否かというのは一つ一つが必要十分であるような素性によって決定され，その範疇に属する成員はすべて同等の資格を持つことになる。しかし，プロトタイプを認める範疇観では，同じ範疇に属する成員でもより典型的なものとそうでないものとの差が存在することになる。言語に関する研究としては，色彩知覚に関する研究をしたBerlin and Kay (1969) や，cup，mugなどがプロトタイプに基づく範疇構造をしていることを示したLabov (1973) などが初期の研究としては有名である。[6]

本節ではこのプロトタイプの考え方をNR現象に適用し，よりプロトタイプに近い形式ほどNR現象を示す可能性が高くなるという予測を立てることにする。

2．NR現象の典型性条件

NR現象は否定の力を主観化したり確信度を弱めたりするために存在する。従って，NR述語は，主観や確信度の存在のみを示すものが最も適していると考えられる。主観の強さ，あるいは弱さを示したり，確信度が高いことあるいは低いことを示す場合には，NR現象の機能以上の意味役割を担うことになるので，普通はNR述語には適さないことになる。この点は中間尺度の原理として捉えられていた特徴である。ただしここで注意しなければならないのは，この典型性条件は中間尺度の原理だけを派生するものではなく，(6)のように主節の否定が副詞などにより強められた場合にNR現象を示さなくなるような場合も説明できる。さらに，思考の存在を示す述語はNR述語になりやすい

が，思考の存在に関して何らかの様態を表す述語はNR述語になりにくいという予測をすることになる。Green（1974：20）の，believe, see, imagine, anticipateなどがNR述語になれるのはhold the opinion thatという意味を持つ場合で，believeがaccept the claim thatの意味を持つ場合，imagineがform a mental imageという意味を持つ場合，そしてseeがperceive visuallyの意味を持つ場合にはNR述語にはならないという観察はここでの予測に合致する。⒆の例に示されているようなPrince（1976）の観察もこの予測に沿うものである。

この典型性条件は，NR述語のばらつきに関してどのような予測をするだろうか。すべての話者にとって，主観，確信度の存在を示す最も無標とされる表現はもっともNR述語になりやすい。それに対して思考や知覚の様態をも表しうる述語の場合には，その表現を単なる主観・確信度の存在を示すと解釈できるかどうかに個人差が存在するために，NR述語として容認されるかどうかに関してばらつきがでると予測される。しかも，どのような語が主観・確信度を示す無標な表現であるかが異なるためにたとえ同系の言語同士でも，類似の述語がNR現象に関して異なった振る舞いをすることが起こるのだと言える。

NR現象の機能から生ずる典型性条件には，他にも人称や時制に関わるものが考えられる。否定を主観化したり，確信度を弱めたりするという場合，通例その主体は話者自身である。従って，NR現象を示す文の主節の主語は典型的には一人称であり，時制は典型的には発話時点を示す単純現在形であろう。この点を支持するようなデータはそれほど多いとは言えないが，次のような指摘が関連するものと考えられる。

Jackendoff（1971：294）の判断では，（26a）は（26b）と同義の解釈が可能であるが，（27a）は（27b）と同義の解釈はできないとしている。

⒇ a. I don't suppose they'll win.
　　b. I suppopse they won't win.

㉗ a. Bill didn't suppose / imagine / guess that they had won.
　　b. Bill supposed / imagined / guessed that they hadn't won.

このような対比は，⒇に比べて㉗が人称・時制の両方で典型条件を満たしていないことと，述語自体も典型条件からややはずれていることが重なり合って生じていると考えられる。事実Jackendoffは時制が現在で，述語が典型性条件を満たしていると考えられるthinkが用いられている（28a）は（28b）と同義の解釈が可能であるとしている。

㉘ a. John doesn't think that Bill went.
　　b. John thinks that Bill didn't go.

またPrince（1976：421－3）は，㉗のような場合でも，引用と考えられるような文脈では，同義の解釈が可能になるとして，㉙のような対比を示している。

㉙ a. *Although he had never consciously thought about it, I knew that, deep down, Bill didn't imagine / guess / suppose that Mary would arrive until next week.
　　b. Bill and I talked for hours about his sisters. He thought that Carol would show up that night, but he didn't imagine/ guess/ suppose that Mary would arrive until next week.

引用と解釈されるというのは，主語がもともとは一人称であり，かつ時制が現在であったと解釈されるということなので，（29a）よりも（29b）のほうが典型性が高いと言える。

本節ではNR現象の典型性条件として二つのものを提案した。それをまとめると㉚のようになる。

(30) a.　述語に関する典型性条件：主観性・確信度の存在のみを示す述語
　　b.　人称・時制に関する典型性条件：一人称・単純現在

特に（30a）から中間尺度の原理が派生されたり，個人ごとあるいは言語ごとのNR述語のばらつきが予測できる可能性を示した。

次節では（30a）の典型性条件を日本語のＮＲ述語に適用し，その妥当性を検討することにする。

VI. 日本語のNR現象

1．日本語のNR現象存在の根拠

日本語のNR現象の場合にも，主節にかかっている否定辞が従属節にかかるように解釈されるか否かを判断する基準は，否定対極表現（Negative Polarity Item以下NPI）である。NPIとは否定の作用域内でしか生起しないとされる表現で，英語のNR現象を紹介する際に本稿で用いたNPIはuntilに導かれた前置詞句であった。日本語のNPIの例として，「ちっとも」，「決して」，「まで」などが挙げられる。

(31) a. *この漫画はちっともおかしい。
　　b.　この漫画はちっともおかしくない。

(32) a. *この理論は決して時代遅れだ。
　　b.　この理論は決して時代遅れではない。

(33) a. *注文した品物は，来月まで届く。
　　b.　注文した品物は，来月まで届かない。

(31)，(32)の「ちっとも」や「決して」は否定を含んだ述語と呼応する副詞である。(33)の「まで」の場合は，英語のuntil句と同様，述部の表す事態がVendler(1957)の言うところのachievementかaccomplishmentの場合にのみNPIとして機能する。(31a)，(32a)，(33a)は，これらの表現と同一節内に否定表現が無いために容認不可能になっている。しかし，(34)では，同一節内に否定が存在しないにもかかわらず容認可能になっている。

(34) a.　［この漫画はちっともおかしい］と思わない。
　　b.　［この理論は決して時代遅れだ］と思わない。
　　c.　［注文した品物は来月まで届く］と思わない。

これは，日本語の場合にも主節にかかっている否定辞が従属節にかかって(35)のような読みを可能にするためであると考えられる。

(35) a.　［この漫画はちっともおかしくない］と思う。
　　b.　［この理論は決して時代遅れでない］と思う。
　　c.　［注文した品物は来月まで届かない］と思う。

2．「思う」と「考える」

(34)の例では，日本語のNR述語として「思う」を使用した。直感的には「思う」は日本語のNR述語の中でも典型性が高いという印象を受ける。そこで，この述語が（30a）の典型性条件にどの程度合致するのかを見る。その足がかりとして，「思う」と「考える」を対比してみることにする。「思う」が単純に概念を想起するという意味合いが強いのに対して，「考える」の場合にはその概念に対して何らかの考察を加えるという意味合いを持つ。このような違いを，森田（1989：265）は(36)のように表現し，(37)のような文で例証している。

(36)　「思う」は「故郷を思う」のように，その対象に対して感情的に心を動かすことから，「少年

時代のことを思う」のような，「考える」に近い，知性を運用させる行為まで幅がある。しかし，「思う」は「考える」と違って，刹那的判断ないしは感性の没入で，それだけに対象把握は単一的であって，物事を分析的に眺めとらえる知的行為ではない。

(37) a.　彼女のことを思う／考える。
　　b.　彼女のことを考えて一番いいように計らったのさ。
　　c.　新しい会社を作ろうと思う／考える。
　　d.　いかにして会社を再建するかを*思う／考える。
　　e.　なぜ間違っているのか*思う／考える。

(37a) では一見すると「思う」と「考える」のどちらでも意味に大きな差が無いように思われるが，「思う」が単に情の働きにすぎないのに対して，「考える」の場合にはあれこれと知性をめぐらし頭脳の働きを展開させる行為であるため，(37b) のような文脈では「考える」が適しているとしている。また，(37c) のように漠然とした事柄だとどちらでも可能であるが，手段や理由など論理的分析過程が関わるような (37d, e) のような場合には「考える」しか使えない。

上で見たような「思う」と「考える」の差は (30a) の典型条件に関してどのような予測をするであろうか。「思う」が単に主観性をつけ加えるだけという意味合いが強いのに対して，「考える」は論理的に分析をするという様態がさらに付け加わっている。その分，NR述語としては「思う」のほうが「考える」よりも典型性が高くなることが予測される。日本語のNR現象を取り上げた文献の中には，「思う」も「考える」も同じようにNR述語としているものもあるが，(38)に示すような容認可能性の差異が存在ように思われる。

(38) a.　この漫画はちっともおかしいと思わない。
　　b.　?この漫画はちっともおかしいと考えない。
　　c.　この理論は決して時代遅れだと思わない。
　　d.　?この理論は決して時代おくれだと考えない。
　　e.　注文した品物は来月まで届くと思わない。
　　f.　?注文した品物は来月まで届くと考えない。

もしこの差異が実際に存在するとすれば，それは (30a) の典型条件を反映しているものと考えることができる。

ただし「思う」の場合でも，何らかの様態がつけ加わるような場合にはNR述語としての解釈がしにくくなると予測される。

(39) a.　注文した品物は来月まで届くと思わない。
　　b.　?注文した品物は来月まで届くと全く思わない。
　　c.　??注文した品物は来月まで届くと全く思わなかった。[7]

(39a) に比べ，「思わない」にNPI「全く」をつけた (39b) は，やや不自然なように感じられる。さらに時制がずれた (39c) の場合にはさらに不自然さが増すように思われる。この差異がどこまではっきりとしたものかはさらに調査を要するが，このような点に関する事実は(30)の典型性条件の妥当性を判断する尺度になるであろう。

3．言語間の対応について

IV．2において，NR述語の言語間の対応について触れた。例えば英語のbelieveに対応する語が言語によってNR述語として用いられたり用いられなかったりという違いが存在することが問題とされていた。この点に関してVI．2の考察から言えることは，単なる言語間の表面上の語彙的対応を

見るだけでは不十分であり，その語が当該言語の中でどれだけの意味要素を担っているかを観察しなければならないということである。英語のthinkは日本語の「考える」と対応するものと捉えられがちであるが，thinkには日本語の「思う」が担っているような意味要素に対応する部分があって，それがNR述語になるのであり，日本語の「考える」はthink以上に付加的な意味要素が存在すると考えられる。Horn（1978）が紹介しているような，言語間のNR述語の対応・非対応の例に関してもこのような観点から洗い直すことによって統一性が見えてくるように思われる。

Ⅶ．まとめと今後の課題

本稿では，まずNR現象の先行研究を大きく二つに分けて紹介した。変形操作による説明では否定辞を従属節から主節へ移動する変形を仮定するが，事実面で多くの反例が挙げられている点，そして理論的にも現在そのような変形操作が認められる余地がないという点などから不適切であるとした。それに対して含意や推論など何らかの意味解釈のプロセスによって説明しようとする立場には，どのような述語の場合にそのプロセスが発動されるのかを規定することに課題が残るとした。そこで，NR現象の機能を，否定を主観化したり確信度を弱めたりするものだとした上で，その機能に最も適した述語，すなわち単に主観性や確信性の存在を示すものが最も典型的にNR述語になりやすいという典型性条件をもうけ，Hornの中間尺度の原理などもこの典型性条件から派生できるのではないかと主張した。また，時制・人称に関しても典型性条件が存在する可能性を述べた。そしてNR述語に関する典型性条件を日本語の「思う」と「考える」に適用した場合，「思う」のほうがより典型的なNR述語であることが予測され，典型性の違いがNR現象の分布にある程度反映されていることを見た。

本論では全く触れる余裕がなかったことであるが，従来NR現象と呼ばれていたものはすべてが同類なのではなく，大きく二つの種類に分けることができるように思われる。ひとつは本稿で論じたように，否定の主張を和らげるために主観的表現に否定を移すという類のものである。もうひとつは従属節が定形節から非定形節に縮約されることにより，あるいは再分析が起こることにより単文化することで生じるものである。この二つの種類は必ずしも相互排他的とは言えないかもしれないが，(40)のような例では，単文化の要因のほうが強いのではないかと思われる。

(40)　a.　It doesn't seem to rain until tomorrow.
　　b.　［注文した品物は明日まで着く］見込みはない。
　　c.　?［注文した品物は明日まで着かない］見込みだ。

(40a) は従属節が非定形節化しているためにuntil tomorrowが従属節に属するとも主節に属するとも解釈されうるという要因が関わっていると考えられる。また（40b）の場合，「見込み」は関係節に修飾された名詞というよりは，「はない」と組合わさって複合的述語を形成しているとも考えられ，それがNR現象を引き起こしていると考えられる。実際（40b）の場合には従属節に否定を置いた場合の（40c）とは明らかに意味が異なり，従って確信度を弱めるという働きをしているとも考えにくい。このような点については今後の検討課題としたい。

日本語に関する事実をもっと集める必要もある。従来日本語のNR現象を取り扱った研究は，多かれ少なかれ生成文法的な枠組で行われ，英語の研究が先行しているため，日本語の事実に関してはまだそれほど掘り下げられているとは言えない状態である。今後はコーパスなどの利用も視野にいれて事実を調査して行きたいと思う。

また，典型性条件の（30b）に関しては，(39)の議論で少し触れた以外は，日本語での検証を行って

いない。これも事実調査の進行と平行して考えて行かなければならない点であろう。

注

1．この現象を，最初に変形操作的な観点から説明したのは，Fillmore（1963）である。
2．McCawley (1988：574f) は，NR現象の変形操作による説明を支持する例の容認可能性にばらつきが見られることを指摘している。そしてその原因としてuntil句のような否定対極表現と否定辞との間にどのようなものが介在しうるかが異なるという可能性と，述語がどれだけ「透明」であるかが異なるという可能性を指摘し，後者の場合は変形操作による説明は成立しないとしている。Kato (1985) は日本語のＮＲ現象に関して，この両方の可能性を取り入れた分析を行っている。
3．(2a) もしくは(11)のような例などを考慮に入れれば，NR現象の場合，否定辞の中立的位置は従属節の動詞の直前と考えられる。
4．(20)に挙げられている述語の中には，補部として非定形節のみを取るものも含まれているが，NR現象の機能という点から見た場合，そのようなものを定形節を補部に取るものと同列に扱うべきかは疑問が残る。本稿では，基本的にNR述語の中でも定形節を補部に取るものを中心に考察を進めていく。
5．これらの事実はHorn（1978：173，187f）による。
6．プロトタイプに関する研究の詳細は，G.Lakoff（1987）を参照のこと。
7．(39b, c) が不自然に感じられるかどうかは，事態がどう解釈されるかに反映される。(39a) では注文した品物が一つで，「届く」という行為も一回限りである。(39b)，(39c) に行くにつれ，その解釈がしにくくなり，あたかも注文した品物が複数で「届く」という行為が来月まで複数回起こるという解釈になってくる。後者の場合はNR現象としての読みではないので，この読みの度合いが強く感じられるにつれて？を多く付すことにした。(38f) についても (38e) にくらべて継続的な読みが強くなると思われる。

参考文献

Bartsch, Renate. 1973. "'Negative Transportation' gibt es nicht." *Linguistische Berichte* 27, 1−7.

Berlin, Brent and Paul Kay. 1969. *Basic Colour Terms: Their universality and evolution*. Berkeley: University of California Press.

Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.

Cattel, Ray. 1973. "Negative transportation and tag questions." *Language* 49, 612−39.

Croft, William. 1993. "Case Marking and the Semantics of Mental Verbs." In James Pustejovsky ed. *Semantics and the Lexicon*, 55−73. Dordrecht: Kluwer.

Fillmore, Charles J. 1963. "The position of embedding transformations in a grammar." *Word* 19：208−31.

言語学研究会編．1983.『日本語文法・連語論（資料編）』　東京：むぎ書房

Green, Georgia M. 1974. *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington: Indiana University Press.

Horn, Lawrence. 1979. "Remarks on Neg-raising." P. Cole ed. *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*, 129−220. New York: Academic Press.

Horn, Lawrence. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.

Horn, Lawrence and Samuel Bayer. 1984. "Short-Circuited Implicature." *Linguistics and Philosophy* 7, 397−414.

Jackendoff, Ray. 1971. "On Some Questionable Arguments about Quantifiers and Negation." *Language* 47, 282−97.

Jespersen, Otto. 1917. *Negation in English and Other Languages*. Copenhage: A.F.Host

Kato, Yasuhiko. 1985. *Negative Sentences in Japanese*. Sophia Linguistica vol 19. Tokyo: Sophia University.

Labov, William. 1973. "The boundaries of words and their meaning." In Charles-James N. Bailey and Roger W. Shuy eds. *New ways of analyzing variation in English.* Washington D.C.: Georgetown University Press, 340−73.

Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, Robin. 1969. "A Syntactic Argument for Negative Transportation." In Binnick, Davidson, Green, and Morgan eds. *Papers from the Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 140−7. Chicago: The University of Chicago Press.

McCawley, James D. 1988. *The Syntactic Phenomena of English Volume 2*. Chicago: The University of Chicago Press.

McGloin, Naomi Hanaoka. 1976. "Negation." In Shibatani, Masayoshi ed. *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, 371−419. New York: Academic Press.

森田良行. 1989.『基礎日本語辞典』　東京：角川書店

守屋哲治. 1990.「否定辞繰り上げ現象について」　『英語教育』28巻11号, 76−79, 12号, 73−75. (1990年1月号, 2月号)

Nuyts, Jan. 1990. "Negative Raising Reconsidered: Arguments for a Cognitive Pragmatic Approach." *Journal of Pragmatics* 14, 559−88.

太田朗. 1980.『否定の意味』　東京：大修館書店

Partee, Barbara H. 1973. "The Semantics of Belief Sentences." In Jack Hintikka et al. eds. *Approaches to Natural Language*, 309−36. Dordrecht: Reidel.

Prince, Ellen. 1976. "The Syntax and Semantics of NEG-Raising." *Language* 52, 404−26.

Sheintuch, Gloria and Kathleen Wise. 1976. "On the pragmatic unity of the rules of neg-raising and neg-attraction." *Papers from the 12 th Regional Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, 548−57. Chicago: Chicago Linguistic Society.

Smith, Steven B. 1974. *Meaning and Negation.* The Hague: Mouton.

Vendler, Zeno. 1967. "Verbs and Times." In *Linguistics in Philosophy*, 97−121. Ithaca, New York: Cornell University Press.

Zuber, Ryszard. 1990. "Negated beliefs and non-monotonic reasoning." in Savas L. Tsohatzidis ed. *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, 132−150. London: Routledge.